

第 1 部 の 凡 例

第 1 部には、「外来語」言い換え提案で取り上げた外来語176語一つ一つについて、提案本体を掲げた後、その外来語についての基本的情報として、【調査データ】【背景事情】【言い換えの論点】を整理して示した。

1 調査データ

【調査データ】には、定着度、公共媒体の頻度、新聞の頻度推移、の三つに関する情報を記した。

1.1 定着度

定着度については、「外来語定着度調査」の結果データに基づいたグラフを二種類（図 1，図 2）掲げ、これらのグラフから読み取れることを簡潔に記述した。「外来語定着度調査」については、本報告書の第 2 部第 1 章「世論調査の概要と外来語の定着度調査の結果」を参照のこと。また、調査結果のデータをもとに、いくつかの指標を立てて外来語の層化を行うことについては、第 2 部第 4 章「外来語の定着度データの分析」（田中牧郎）を参照してほしい。

図 1 は、認知率、理解率、使用率を、国民全体と 60 歳以上とで分けて集計したデータを示したものである。これらのデータのもとになった数値は、本報告書の第 2 部第 1 章「世論調査の概要と定着度調査の結果」の表 1，表 2 と対応している。図 2 は、認知率、理解率、使用率を、10 歳刻みの年齢層別に集計したデータを示したものである。

グラフから読み取れることを、（1）定着度全般、（2）認知率と理解率の乖離度、（3）理解率と使用率の乖離度、（4）年齢層による定着度の散らばりと偏り、について、簡潔に記した。記述の表現様式は、おおむね次の数値基準にしたがったが、個別の事情によってやや表現を変えたところもある。

（1）定着度

国民全体の理解率に着眼して 8 段階に分ける。次のような数値基準を立て、おおむね右側に示す表現で記述した。

a	12.5%未満	定着度はきわめて低い
b	12.5%以上 25.0%未満	定着度は低い
c	25.0%以上 37.5%未満	定着度はやや低い
d	37.5%以上 50.0%未満	定着度は中程度だがどちらかといえば低い
e	50.0%以上 62.5%未満	定着度は中程度だがどちらかといえば高い
f	62.5%以上 75.0%未満	定着度はやや高い
g	75.0%以上 87.5%未満	定着度は高い
h	87.5%以上	定着度はきわめて高い

なお、「外来語」言い換え提案では、定着度の段階は 4 段階にまとめ、星印で表示しているが、上記の 8 段階の区分との対応を示すと、次の通りである。

a・b	★☆☆☆	c・d	★★☆☆
e・f	★★★★☆	g・h	★★★★★

（2）認知率と理解率の乖離度

国民全体の認知率と理解率のデータを相互に比較し、次の二つの指標による基準を立て、いずれかの指標で乖離度の大きい場合に言及した。ただし、定着度が非常に低い、認知率 12.5%未満の語の場合、乖離度を測ること自体にあまり意味がないと考えて、いずれの指標もあてはめなかった。

○認知率と理解率の比に着眼した指標

- | | |
|----------------------|--------------------|
| ・ 認知率÷理解率が、2以上 2.5未満 | 認知率と理解率の乖離が大きい |
| ・ 認知率÷理解率が、2.5以上 3未満 | 認知率と理解率の乖離がかなり大きい |
| ・ 認知率÷理解率が、3以上 | 認知率と理解率の乖離がきわめて大きい |

○認知率と理解率の差に着眼した指標

- | | |
|----------------------------|--------------------|
| ・ 認知率－理解率が、25.0%以上 30.0%未満 | 認知率と理解率の乖離が大きい |
| ・ 認知率－理解率が、30.0%以上 35.0%未満 | 認知率と理解率の乖離がかなり大きい |
| ・ 認知率－理解率が、35.0%以上 | 認知率と理解率の乖離がきわめて大きい |

(3) 理解率と使用率の乖離度

国民全体の理解率と使用率のデータを相互に比較し、次の二つの指標による基準を立て、いずれかの指標で乖離度の大きい場合に言及した。ただし、定着度がきわめて低い、理解率12.5%未満の語の場合、乖離度を測ること自体にあまり意味がないと考えて、いずれの指標もあてはめなかった。

○理解率と使用率の比に着眼した指標

- | | |
|----------------------|--------------------|
| ・ 理解率÷使用率が、2以上 2.5未満 | 理解率と使用率の乖離が大きい |
| ・ 理解率÷使用率が、2.5以上 3未満 | 理解率と使用率の乖離がかなり大きい |
| ・ 理解率÷使用率が、3以上 | 理解率と使用率の乖離がきわめて大きい |

○理解率と使用率の差に着眼した指標

- | | |
|----------------------------|--------------------|
| ・ 理解率－使用率が、25.0%以上 30.0%未満 | 理解率と使用率の乖離が大きい |
| ・ 理解率－使用率が、30.0%以上 35.0%未満 | 理解率と使用率の乖離がかなり大きい |
| ・ 理解率－使用率が、35.0%以上 | 理解率と使用率の乖離がきわめて大きい |

(4) 年齢層による定着度のちらばりと偏り

10歳刻みの年齢層を設定し、それぞれの理解率のデータをもとに、次の二つの指標による基準を立て、年齢層による定着度のちらばりと偏りが目立つ場合に言及した。ただし、定着度が低い、国民全体の理解率が25%以下の語の場合、ちらばりや偏りを測ること自体にあまり意味はないと考えて、いずれの指標もあてはめなかった。また、10歳代、70歳代以上は、国民全体に比較して差異の大きいデータを示す場合が特に多いため、偏りがある場合も言及しなかった。

○理解率の10歳刻みのデータの標準偏差に着眼した指標

- | | |
|-------------|-----------------|
| ・ 標準偏差が10以下 | 年齢層による差異はあまりない。 |
| ・ 標準偏差が20以上 | 年齢層による差異が大きい。 |

○理解率の10歳刻みのデータと全体平均のデータの比に着眼した指標

- | | |
|---------------------------------|-----------|
| ・ 理解率の、〇〇歳代÷全体平均が、0.5未満 | 〇〇歳代が特に低い |
| ・ 理解率の、〇〇歳代÷全体平均が、0.5以上 0.667未満 | 〇〇歳代が低い |
| ・ 理解率の、〇〇歳代÷全体平均が、1.5以上 2未満 | 〇〇歳代が高い |
| ・ 理解率の、〇〇歳代÷全体平均が、2以上 | 〇〇歳代が特に高い |

1.2 公共媒体の頻度

公共媒体の頻度については、2003年発行の白書・広報紙・新聞を対象とした調査に基づいたグラフ（図3）を掲げ、このグラフから読み取れることを、簡潔に記述した。この調査の目的や統計処理の詳細については、本報告書の第3部第1章の「媒体別の外来語の特徴」（田中牧郎）を参照してほしい。

図3の上のグラフは、白書・広報紙・新聞の三つの媒体における、各外来語の出現頻度を出現率によって示したものである。出現率は、各媒体での使用度数を、各媒体の総文字数で割ったものに、 10^6 を乗じたものである。つまり、100万字のなかでその語が何回使われているかを示している。

$$\text{出現率} = \text{使用度数} \div \text{総文字数} \times 10^6$$

図3の下グラフは、三つの媒体における出現頻度の比を示したものである。表示する数値は、各媒体の出現率が、三つの媒体の出現率平均と比較してどれだけ特異であるかを示す、特化係数である。

特化係数 = 当該媒体の出現率 ÷ 三つの媒体の出現率平均

グラフから読み取れることを、(1) 公共媒体(全体)の頻度、(2) 媒体による偏在度、の二つの観点から、簡潔に記述した。記述の表現様式は、おおむね次の数値基準にしたがったが、個別の事情によってやや表現を変えたところもある。

(1) 公共媒体(全体)の頻度

- | | | |
|---|--------------------------|----------------------------|
| a | 出現率の三媒体の平均が、0.01未満 | 公共媒体における頻度はきわめて低い |
| b | 出現率の三媒体の平均が、0.01以上 0.1未満 | 公共媒体における頻度は低い |
| c | 出現率の三媒体の平均が、0.1 以上 0.3未満 | 公共媒体における頻度はやや低い |
| d | 出現率の三媒体の平均が、0.3 以上 0.6未満 | 公共媒体における頻度は中程度だがどちらかといえば低い |
| e | 出現率の三媒体の平均が、0.6 以上 1.5未満 | 公共媒体における頻度は中程度だがどちらかといえば高い |
| f | 出現率の三媒体の平均が、1.5 以上 3未満 | 公共媒体における頻度はやや高い |
| g | 出現率の三媒体の平均が、3以上 10未満 | 公共媒体における頻度は高い |
| h | 出現率の三媒体の平均が、10以上 | 公共媒体における頻度はきわめて高い |

(2) 媒体による偏在度

各媒体の特化係数に着眼し、次の数値基準にあてはまる場合に言及した。ただし、(1) 公共媒体(全体)の頻度において、「きわめて低い」「低い」「やや低い」とされた語の場合は、偏在度を測ることの意味がやや小さくなると考え、段階を1段階引き下げた。

- ・ 特化係数が、2.8以上 偏在度がきわめて高い
- ・ 特化係数が、2.4以上 2.8未満 偏在度が高い
- ・ 特化係数が、1.8以上 2.4未満 偏在度がやや高い

なお、今回調査対象とした2003年発行の白書・広報紙・新聞に、全く出現しなかった外来語がいくつかあった(カスタムメイド、コンファレンス、メディカルチェック、レシピエント)。これらの語のグラフはない。「外来語」言い換え提案では2004年以後の公共媒体も調査対象としているため、これらの語は、そこで拾われて提案対象語となったものである。

1.3 新聞の頻度推移

新聞の頻度推移を観察することによって、各外来語の通時的変化の方向性を見る。調査の対象は、1991年から2004年までの、読売新聞と毎日新聞である。調査結果のデータに基づいたグラフ(図4)を掲げ、このグラフから読み取れることを、簡潔に記述した。

この調査の目的や統計処理の詳細については、本報告書の第3部第5章の『『外来語』言い換え提案対象語の頻度推移類型—読売新聞・毎日新聞14年分を調査して—』(柏野和佳子)を参照してほしい。この論文で示す六つの型に対応付けて、右側に示すような表現様式で記述することを基本とした。ただし、複数の型の要素が複合する語の場合は、それぞれの性質について言及した。また、読売新聞と毎日新聞とで型が異なる場合は、両者を総合した見方で記した場合もある。増減の進行について特徴がある場合は、特徴に応じた記述を行った。

- ・ 突出型 ○○年に突出する。／○○年に特に多い。

* 突出の理由が分かるものは言及する。また、突出の理由が、その外来語の普及にとって重要なものである場合は、【背景事情】の項で、詳しく取り上げる。

- ・ 増加型 全体として増加の方向にある。／○○年以後増加の方向にある。

- ・減少型 全体として減少の方向にある。／〇〇年以後減少の方向にある。
- ・山型 〇〇年まで増加した後、減少の方向にある。／
〇〇年まで増加後、しばらく横ばいで、〇〇年から減少の方向にある。
- ・水平型 ほぼ横ばいである。
- ・非特異型 全体を通した増減の傾向はない。定着に至らない段階で不安定な使用状況にある。

2 背景事情

【背景事情】には、その外来語が日本語に取り入れられた事情や、その背景にあった、学術・政策・業界などの目立った動きなどについて、外来語を分かりやすくする工夫を行おうとする際にも知っておくと役立つことを、簡潔に記した。また、この14年ほどの間に、その外来語や、表す概念をめぐって特筆すべき出来事があった場合も、ここに記した。

3 言い換えの論点

【言い換えの論点】には、その外来語を分かりやすく言い換えたり、説明を付けたりする工夫をめぐって、「外来語」委員会での検討において、論点となったことを記した。提案のために重点的に議論した点、委員会の中で意見が対立した点、委員会に対して外部から寄せられた重要な意見などを中心に記した。